

第3章 特用作物に関する研究

第1節 研究の変遷

1. 藍

明治36年の当時発足当時の試験研究は主食の稲、麦に重点がおかれていたため、特用作物に関する研究は数少なく、対象作物の種類も藍、大豆、ナタネくらいであり、農商務省農事試験場四国支場から引継いで行われた試験が主体になっている。

藍は本県の特産物で全盛時の明治36年には1万5000町歩の作付面積があり、全国の約3分の1を占めていた主要作物であったが、化学染料の出現によって明治末期以後急激に衰退した。したがって藍作に関する研究はそれ以前のものが多く、四国支場技師吉川裕輝氏による「阿波国藍作法」(明治31年)、徳島県立農試の「阿波の藍作」(大正5年)等にその成果がみられる。明治30～37年に行われた品種試験では、小上粉が収量、品質の最も優れた品種として選出されている。その後大正9年に県外の品種を加えて検討されているが、本県の小上粉に優る品種は出ていない。栽培面では肥料試験が明治36～44年に実施され、本県の施肥基準を確立している。

また藍の害虫について大正8年から11年に調査し、その成果を「藍作害虫に関する調査報告」として大正12年に発表している。その後藍作に関する研究はみられず現在試験場では小上粉(白花種)について、その純度を保持するための純系淘汰を継続中である。

2. 大豆

本県の大豆は主として自家用に栽培するものが多く、栽培面積は明治初期では5,000町歩を超えていたが明治36年では3,800町歩となり、さらに大正後期からは輸入大豆の増加で1,000町歩台に減少している。

大豆に関する研究は専ら品種試験であり、四国支場から引継がれた試験は明治41年まで実施されているが、その後大正時代の試験はみられない。

昭和10年から奨励品種選定試験が本場で行われているが、昭和13年以降は新設された池田分場で試験と採種栽培が実施されている。第2次大戦前後は輸入量が減り国産大豆の作付が増加したが、昭和20年代後半から安いアメリカ大豆の輸入が次第に増大したため、一時増加(33年、2,600㍏)した県内の作付面積も昭和47年には1,000㍏を割っている。このようなことから池田分場における大豆の品種試験は昭和44年で中止された。その後米の生産過剰対策として水田での稲に代る転作物として大豆が奨励されるようになり、今まで中止されていた本場での大豆に関する試験が、転換畑を対象として昭和48年から国補事業で実施されるようになった。

3. ナタネ

水田裏作の換金作物として明治前期では1,000町歩以上の作付がみられており、これに関する研究も四国支場より引継がれた試験が明治時代に実施されている。品種では大朝鮮、長州、三重などが選出され昭和初期まで本県の主要品種として栽培された。栽培法では明治36～41年に直播栽培が検討されており、さらに栽植様式の見直しで耕種基準が作成された。しかし裏作麦の増加とともにナタネ栽培は衰退し、大正末期には100町歩を割る面積となり、この時代の試験は見当らない。昭和5年に政府は農村不況の打開策としてナタネの大増産を打出し、全国的な育種組織を作って生産の増大を図った。昭和12年からの日華事変とこれに続く第2次大戦で、食糧自給をはかるため主食増産への転換が強化され、終戦当時は殆んど作付がみられなかった。戦後生活の安定と油脂資源の自給確保の面からナタネ栽培が急増し昭和28年には1,490㍏に達した。この間の試験は昭和8年から新育成系統についての品種試験と戦後は除草剤を含め栽培法の改善試験が実施され、また池田分場や富岡分場でも試験が行われた。しかし昭和30年代から40年代にかけての急激な経済の発展で農村の労働力が都市に吸収され、生産性の低いナタネは麦作とともに衰退し、試験は44年(富岡分場)で打切られ昭和52年以降は栽培面積も統計書からみられなくなった。

4. テンサイ

テンサイは我が国の甘味資源作物として、サトウキビとともに主要な位置を占めている。昭和28年に「てんさい生産振興臨時措置法」が制定され、次いで昭和34年に「甘味資源自給力強化総合対策」が立てられて国内産糖の振興が総合的に企画された。すなわち北海道のみならず暖地向品種を育成するため、テンサイ研究所の熊本支所が設置された。このため本県でも、昭和33年から38年までテンサイに関する試験が実施され、一般農家でも試作的な栽培が行われた。しかし国における諸般の事情で暖地テンサイの生産が中止されたため試験も38年で打切られた。

5. その他

ステビアは甘味植物として昭和46年に農林省北海道農業試験場がブラジルから導入したものである。本県では四国農試から種子の配付を受け、昭和49～50年に栽培特性の試験を実施し、暖地でも比較的容易に栽培できることを確認した。そこで水田再編対策における転作物としてこれを導入するため、甘味度の高い有望系統を選抜するとともにその栽培法を検討している。その他水田転換畑に適する特用作物を探索し、その一つに薬用、保健用食品としてハトムギについて試験を実施している。またコンニャクについては、池田分場、病虫科、農芸化学科で実施されておりワタ、ミツマタ、タバコ、茶などは池田分場が担当している。